

御快被召上候、依之五郎左衛門は鞠子へ歸申候茲之御一生鞠子より毎日運び申候、公家衆毎年
御下向にも、五郎左衛門方へ御立寄被聞召、都にも稀成まし、然らば名物は土地によると見えた
り、

〔守貞漫稿_五業〕粟餅店

_{生業}

此店常ニ稀ニシテ寺社開帳等群集ノ路傍ニ專ラ賣之、其術尤奇トス、一握スレバ指間各一顆ヲ
出シ、都テ一握四顆ノ團子ヲナス、其形無大小、コレヲ切テ六七尺餘間アル盤中ニ投ズ、其速妙ナ
ル、空ヲ飛ブコト二三顆ヲ絶セズ、盤中豆粉ニサタウヲ和シ、コレヲツケテ賣ル、

〔用捨箱_上〕餅屋の看板

我衣に古來饅頭うる見世の縁先に、木馬を出したり、アラウマシといふ心を表したり、元祿の比
やみたもといふ事あり、此草紙に合せ考べき事を未見いです、

江戸三吟_{延寶六年印}

千早振木で作りたる神姿

岩戸ひらけて饅頭の見世

桃青
信章

前句を木にて作りし神馬と見、饅頭の見世と附たる、若それかとおもはるゝは、此附合の句のみ
なり、さて我衣は、江戸の古老の筆記なれば、他國には今もあるべしと探もとめしを、今難波に住
る友人其樂子が聞て、便の序に木馬の看板二ヶ所あり、大坂大寶寺町筋心齋橋東北側、世俗馬の
餅屋と唱又河内國石川郡_{竹内街道}上の太子への追分角、角屋といふ餅屋、此木馬はことに古雅な
り、主人に故を問しかば、我家の餅は足がつようてうまきにより、昔より此看板を出ししきたりし
と答ぬといひおこせたり、○中土に摸したるは近く寶曆の頃刊行なし、お伽鳥づくしといふ
草紙に見えたる圖なり、○略、圖、如此馬に假面をかぶらせし看板、今に難波にありと聞しが、其所を